

3 四国の自然災害

四国には険しい山地が多くあります。なぜでしょうか。それは、フィリピン海プレートが押しつけて、四国の下で潜り込んでいるため、四国の陸地が隆起しているからです。また、気象的には四国山地を境にして、太平洋側は日本でも有数の豪雨地帯であり、瀬戸内側は日本で最も雨の少ない地域の一つとなっています。このような地形・地質の条件と気象の特性から、四国では次のような自然災害が起こります。

◆豪雨災害（水害・土砂災害）

集中豪雨は梅雨前線・秋雨前線や台風によりもたらされます。最近では、平成一〇年（一九九八）九月の高知豪雨災害と平成一三年九月の高知県西南部豪雨災害、平成一六年と平成一七年の台風災害と立て続けに豪雨災害が発生しています。特に、平成一六年には多くの台風が四国に上陸、もしくは影響を与え、大変な災害が発生しました。

台風災害が発生するのは、四国は山地が急で、地盤が弱く、大雨が降れば、山の斜面が壊れて土石流や鉄砲水が発生し、川は洪水で溢れてしまうからです。



▲ランドサットから見た四国の姿

◆地震災害（地震・津波）

四国に大きな災害をもたらす地震には、二つのタイプがあります。一つはプレート境界型の南海地震で、もう一つはプレート内（活断層型）地震です。南海地震は、高知県沖で一〇〇年から一五〇年の周期で発生する大地震です。震度六強という強い揺れと最大で一〇メートルを超えるような大津波が併せて発生する世界でも珍しい地震です。前回の南海地震は昭和二十一年（一九四六）に発生しており、既に六〇年が経過しています。そのため、今後三〇年間の地震発生確率は五〇%以上と言われています。活断層型地震は、鳴門市から三好市、新居浜市、そして松山市から伊予市を通っている中央構造線などの活断層が動くことにより起こるものです。兵庫県南部地震は活断層が動いたことにより発生しました。

◆高潮災害

高潮とは海水面が高くなって、防波堤などを乗り越えて海水が浸入してくる現象です。高潮は台風や発達した低気圧により、気圧低下に伴う海面上昇と強い風による海水の吹き寄せで発生します。高潮が発生する場所は、湾の奥やゼロメートル地帯、河口部などです。昭和三四年（一九五九）の伊勢湾台風では数千名の方が亡くなっています。また、平成一六年（二〇〇四）の台風一六号では、高潮により高松市を中心に二万戸以上の家屋が浸水しました。

◆渇水災害

北四国の瀬戸内側では年間降雨量が一、一〇〇ミリメートル前後と非常に少ない上に、人口が多く、産業活動が活発なので慢性的に渇水災害に悩まされています。特に、平成六年（一九九四）の渇水災害は深刻で、松山市では四ヶ月も時間断水となりました。讃岐平野には、ため池が無数に点在しています。水で苦労した先人達の汗の結晶です。今は、吉野川から分水されていますので、少しは水不足が解消しています。

4 調べぬみやび

この冊子「四国防災八十八話」は、「はじめに」でも触れましたように私たちが住む四国各地に伝わる地震や津波による災害、台風や大雨、渇水などの気象災害、地すべりや崩壊と言った斜面災害などが発生した年月日や災害のようす、さらには被害を最小限に食い止めるための先人の工夫や知恵をまとめたものです。こうした自然災害は、四国各地で数多く発生しています。それらの自然災害の中から時代や地域に偏りがないよう考慮して八十八話を選びました。ですから、読まれた皆さんの身近な場所で発生した自然災害や災害にまつわる言い伝えがこの冊子には取り上げられていない話がたくさんあると思います。

そこで、ぜひ、お父さんやお母さん、おじいさんやおばあさん、地域のことをよく知っている大人の人から、皆さんの住んでいる場所にまつわる災害や災害から身を守った体験談を聞いて文章や図にまとめてみてください。また、昭和の南海地震など四国各地で被害がでたものもありますので、この冊子に紹介されている災害についても、皆さんが住んでいる場所ではどういった被害がでたのかを大人から聞き、同様に文章や絵、図などにまとめてみてください。そのときにどういった内容のことを聞けばよいのかを次に書き出します。参考にしてください。

① 皆さんが住んでいる場所でこれまでどういう自然災害があったのか。地震とか津波、洪水、地すべりなど、について聞いてみてください。それら一つ一つの

② 話してくれた方の住んでいた場所（地図に示す）や災害の発生した場所、発生した時代（年月日）。その時、話してくれた人は何歳だったのか。あるいは、その人も誰か別の人から聞いた話なのか。

③ どういった状況で、どのような被害がでたのか？ 家が倒れたとか半分がこわれた、あるいは家が流された、家が水につかった、というような被害のようす。被害を受けた戸数など。亡くなった人やけが人が何人いたか。くわしい人数がわからない場合は、おおよその人数。

④ その時、住んでいた人たちは、どう助け合ったのか。そして、どうその災害に立ち向かったのか。

⑤ その災害からどういうことを学んだのか。そして後世へどういった教訓を伝えたのか。今生きている私たちは何を学ばなければならないのか。

⑥ この時の災害を後世に伝える石碑や文章（古文書や新聞記事）などの記録や災害の爪痕が残っているかどうか。残っていたら記録を分かりやすい言葉に書き直し、災害の痕跡などが残っている場所を地図に示す。痕跡が残っていないなくても災害が発生した場所へ行つて、現在の様子を見てスケッチしたり写真にとっておくことも大切です。どういった場所が危険かがわかりますから。

以上を参考に、地域のことをよく知った大人から話を聞き、皆さん自身の言葉で文章と絵、図にまとめてみてください。紙芝居にするのもおもしろいと思います。こうした作業をおして、住んでいる地域のどこがどう危険なのかを理解できると思います。そして、まとめたものを災害が起こったことを知らない人たちへ、その場所に住むためにはどういった災害への注意や備えが必要かを教えてあげてください。

例

① 昭和の南海地震 一九四六（昭和二一）年一月二日早朝

② 四国中央市××町〇〇に住んでいる

近所のおじいさん（関川石太郎さん、七〇歳）当時九歳

③ 夜が明け切らない朝方、ミシミシと家が揺れるので目を覚ました。隣に寝ていた母親にしがみつき、真っ暗な中、ふるえていた。父親が「大きな地震だ。じっとしとれ」と興奮した大声で言った。長い間揺れ

た。揺れがおさまったので、家の外に出ると近所の人も出てきた。さいわい私の家では屋根瓦が数枚落ちたのと土壁が二ヶ所壊れただけであった。近所の家もたいした被害はでなかった。その後も地震（余震）が何度も起こるので、家族みんなが庭でたき火をしながら昼頃まで外で過ごした。

④ 近所の人と「だいじょうぶか」とか「なんともなかったか」と声かけをして、お互いの無事を確認しあつた。真つ暗な中、声をかけ返事があると地震のこわさが薄らぎ、心が落ち着いたように思う。

⑤ 地震は突然起こるのでこわい。こんなに大きな地震が来るとは誰も思つてもいなかった。地震について知っていればもう少し落ち着いておれたのではないかと思う。真つ暗な中にいると非常にこわい。庭でたき火をすると寒さをしのげただけでなく、たき火の明かりでみんなの顔が見え心が安らいだ。近所の人との声かけも恐怖心が薄らいだ。手元にマッチがあり、軒下に積んでいたマキがあったので、たき火ができた。これらがなかったら寒くて外に出ておれなかっただろう。

⑥ 地震があつたことや被害の様子は「〇〇町史」や「××市史」に出ているし、昭和二十一年一月二日付けの「△△新聞」にも出ている。戦争中に松ヤニをとった海岸の松林は、地震後、地盤沈下により海水が松の根元をあらい、次々に枯れてしまった。確かに戦前、海岸を写した写真には松林が広がつていて、その奥（北）に海がある。

紙芝居



①



④



②



⑤



③



⑥